



百神百年大戦

HYAKKUSHINEN TAISEN

story by avamura akamitsu
Illustrations by kakage

あわむら赤光 — イラスト かかげ

ひやくしん
ひやくねん
たいせん

「われわれいったいどれだけ上古のことであつたらうか。
神々にとつて、人間とはなんぞや？」

そう広く問いかけた、若い神がいた。

多くの神々がそれに答えた。

曰く、いわ「路傍ろぼうの石」

曰く、「虫ケラよりは上等なもの」

曰く、「下僕」

曰く、「慈悲をかけてやるべき哀あわれなる定命じやうみやうの者」

そして、リクドローの答えは――

プロローグ

リクドーは剣の神に相応ふさわしい、一振りの銘刀を髣髴ほうふつさせる体つきをしていた。

あたかも鍛え抜かれた玉鋼の如ごとく、それでいて粘りを持つかのようにしなやかで、完璧かんぺきに均整のとれた、その体軀たいく。

無駄むだなものは一切いっさいなく、無論のこと芸術的な美しさを湛たたえる。

顔だけ見れば、十代半ばの少年のようなのに。神でもなければ、これほど戦士として極まった

肉体を、人が十代のうちに手に入れるのは不可能であろう。

ベッドの上にさらされたリクドローの裸身を、寝顔を――彼女はすぐ隣でひたと見つめ続ける。

名画を觀賞するように。

それでいて、情愛と情欲に濡れた眼差しで。

何より、記憶に焼きつけようとするかのような真剣さで。

彼女もまた美しく、妙齡の女にしか出せない色気をたっぷりと備えていたが、やはり神と比べてしまふとどこか落ちる。瑕瑾がある。

そのことを誰よりも彼女は自覚している。

自嘲の苦笑いで、気分を紛らわす術にも慣れた。そうして、リクドローにしなだれかかる。

彼女もまた裸身であった。

肌と肌をしつとりと重ねて、さらにリクドローの遅^{たくま}しい胸板を愛撫^{あいぶ}する。

この男神に仕え、身も心も捧^{ささ}げ、長い間を連れ添^そってきた。どんな風にしてやれば悦^{よろこ}ぶかは、知り尽くしている。

「ん……っ」

堪^{たま}らずリクドローが吐息を漏^もらした。

穏やかに閉じていた瞼^{まぶた}が震えだす。

目覚めの合図だ。

リクドローはゆっくりと、瞼を開いた。

寝惚^{ねぼ}け眼が焦点を結び、やがて視界がくつきりとなる。

すぐ間近で寝顔を覗^{のぞ}き込んでいた、彼女の美貌に気づく。

半分は伸ばした前髪に隠れているけど、それがまた大変に色っぽい。

「おはよう、ヘルガ」

名を呼んで、もつとしっかかり抱き寄せる。

彼女の温^{ぬく}もりや肌触りの艶^{つや}やかさ、肢体の柔ら

かさがより一層に感じられる。

すると彼女ヘルガもまたうれしそうに、形の良い唇を寄せてきて、ささやいた。

「おはよ、リクドール」

彼女の吐息で耳たぶを、声音で鼓膜をくすぐられ、リクドールはゾクツとさせられる。

しかもヘルガは、追い打ちのようにキスをしてくる。軽く短くついでに、戯たわむれるように、最初はリクドールの鼻頭へ、次いで額、両の頬ほお――最後は唇。

くすぐったいけど、気持ちいい。

リクドールは倍にしてやり返す。

ヘルガが堪らぬ様子で、嬌声きよしせい混じりに笑い出す。

「やめて、私、そんなにやってないわよっ」

「俺おれの寝顔を眺めてたろう？ 悪い趣味だぜ。こ

れはその分もコミだ」

「悪いのはリクドーよ。とつても可愛かわいい寝顔をしてるんだもの。見入っちゃうわ」

唇や舌を使って交互にくすぐり合い、じゃれ合
いながら、睦言むつごとを交わす。

「俺みたいなのオッサンに向かって、可愛いはない
だろ？」

「でもホントのことでしょ？」

ヘルガはからかうように笑いながら、リクドー

の顔をつついた。

十代も半ばの少年にしか見えない、童顔だ。

「あなたが数千年も生きてる最古の神のひとりだなんて、未だいまに信じられないわ」

「神の中にゃあ、生まれた時からジイサンの姿をした奴やつもいるし、俺はこの姿で生まれた」

こんなものは見た目のことではかない。

実際、リクドールが浮かべる表情は若者にはありえない、くたびれた中年オヤジのように気怠けだるるげなものだ（そしてだからこそ、安らかな寝顔が可愛く見えるのだらう）。

「基本、俺たちの肉そとみ体はそのままずっと不変なん

だよ。精神なかみと違つて」

付け加えれば、精神年齢の成長速度には個神差がある。

「ええ、神様ってのはそういうものだつて、会つたその日に教えてくれたわよね」

「だつたっけか？ さすがに憶おぼえてないな」

彼女のおでこに額をこすりつけるリクドー。

ヘルガと出会つたのはもう十五年も前のこと。

類たぐいまれ稀まれな靈アウラ力の持ち主だつた少女が、“ヴェステル

火山の巫み女こ”として見いだされ、彼と契りを結んだ。

というだけではなく、性格的にも馬が合つた。

ヘルガは竹を割ったような人柄だが、押しつけがましいところは微塵みじんもない女で、一緒にいて楽しさや温かみを感じることはあっても、何か気に障さわるといふことが一度たりとなかった。ケン力なんて数えるほどしかしなかった。

男女の仲とか神と巫女の関係性だとか、そんなものの以前に、ひとりひとりとしての互いに尊敬し合える間柄だった。

リクドーも多くの巫女と契ってきたが、ヘルガほどのパートナーはいなかったし、最も多くの愛情そそを注いだ相手であった。

とーそんなヘルガが、なぜ今さら神の外見が不変であることや、十五年も前の話を蒸し返すのだろうか？

（変な奴だな）

リクドーはおかしくなっで、どう擲揄やゆしてやろうかと考えた。

しかし、ヘルガに機先を制される。

「知ってる？ 今日、私の誕生日なのよ」

そう言っでヘルガは、頬に頬を寄せてくる。

「もちろん。ちゃんどプレゼントも用意してあるぜ？」

リクドーはその柔らかさを堪能しつつ、自分も

頬でこすり返した。

気持ちいいだけでなく、心安らぐスキンシップ。彼女の顔が見えなくなるのだけがネツクだが、頓着なしに続ける。

「前に一回忘れた、あん時だけはこっぴどく拗すねられたからなあ。誕生日は忘れないよう肝に銘じているんだ。モノグサのこの俺がだぜ？ ぜひ光栄に思つて欲しいね」

そんな風に冗談めかすりクドー。てつきり彼女もクスリとしてくれると思つたのに、ヘルガは笑わなかつた。それどころか――

「私、今日で三十歳なのよ」

彼女の声に、急に、湿り気が混じった。

リクドーはぎよっとなるしかない。

どうしたのかとヘルガの顔色を窺うかがおうとしたが、
頬と頬を合わせた格好のまま、彼女がほとんどし
がみつくように強く抱きついてきたから、それも
できない。

「……だっただっけか？ ……それも憶えてないな」

「嘘うそつき。でもリクドーのそういう、優しい嘘が
大好きだったわ」

ぐしゅっ、とヘルガが鼻を鳴らした。

声に混じる水音は留とどまるところを知らなかった。

「……いやいや……嘘じゃねえってば、ハハ……。
美人さんは若く見える……からな。……全然、気
づかなかったな……ウン」

ヘルガの急な態度や妙な台詞せりふに、たじたじにさせられつつリクドーは、つつかえづつつかえ言葉を絞しぼり出す。

「でもね、もう、立派なオバサンよ」

「オツサンの俺と……釣り合いがとれてるってもんだな……ハハハッ」

……なんだか愁嘆場しゅうたんばじみてきたように思えるのは、気のせいだろうか？

「私ね、決めてたのよ。三十になったら巫女を辞

めて、あなたの元から去るって」

「おお……神よ……」

「ふふっ。神様はあなたでしよ？」

ヘルガはやっとなげき出してくれたが、その笑い声すらもうずぶ濡れだった。

くつついた二人の頬の間からは、既に涙が滲にじみ出ている。

（気のせいじゃねえじゃんか。ガチもんの愁嘆場じゃねえか）

どうしてこうなった。

リクドーは頭を抱える衝動を堪こらえた。そっちを抱えれば、ヘルガから手を離すことになっってしまう。

ヘルガも頬をびっぴたりとくっつくつけたまま、表情を決して見せようとはしなかった。

「……冗談だよな、ヘルガ？」

「私、こんなことを冗談で言うほど、いやな女の一つもりはないわ」

「考え直してくれるよな？」

「ずっと前から、何度も考えたわ。でもやっぱり、決心は変わらなかった」

「どうして……」

何が彼女にそれほどの決断をさせたのか。

ヘルガは訥々とつとつと答えてくれた。

「あなたはこれからも永遠に、若い姿のまままで生

き続ける。でも、私はもうこれから老いる一方よ。年寄りになっただけでいく姿を見せたくない。美しいままの私であなたの記憶に残りたいの」

「そんな……悲しいこと、言ってくれなよ……」
リクドローは懇願した。

だが、ヘルガは返事をしてくれなかった。

返事をくれないから、リクドローも会話を続けることができない。

(……そんなもん気にするなよ。……おまえはいくつになっても美しいよ)

言葉を言いかけ、呑み込み、また何かを言いかけ、呑み込むことしかできない。

どんなに嘘偽りのない台詞や気持ちでも、ヘルガはただの慰めと受けとるだろうからだ。

肚はらを決めるしかなかった。

少年みみたいな外見をしていようが、オッサンみみたいな中身をしていようが、リクドローは男なのだ。そこに神も人もない。

「顔を見せてくれよ、ヘルガ」

彼女はしばし躊躇ちゆうちゆうしていたが、やがて、くつつけていた頬を離した。

ぐしゃぐしゃに泣き濡れた顔がそこにあった。

リクドローはそっと、ヘルガの顔へ半分かかった前髪をかきわけける。

露^{あら}わになつた彼女の美貌全部を、目に焼き付ける。そう、彼女は美しかった。

若々しかつた。二十五と言つても誰も疑わないし、二十歳と言つてもぎりぎり通るはずだ。

歳^{とし}のことなど気に病む必要もないのに……それはあくまで男の理屈でしかないのか？

「おまえのことは忘れないよ。永遠に」

「……ありがとう。……大好き」

ヘルガがもう一度しがみついてきた。

「私もあなたのこと一生、忘れない。でも、巫女を辞めたら結婚相手を探すつもりよ」

ひどいことを言っているようで、リクドールを気

に病ませないよう、ヘルガの心遣いが感じられる台詞だった。そんじよそこらの小娘にはできない台詞だった。

なんて佳^い女なのだろうか！

「おまえなら、俺なんかよりもっといい男を捕まえられるよ」

口では別れの言葉を告げつつ、腕は未練のままにヘルガの体を強く抱き締めた。

「ふふっ。それは難しいと思うけれど……がんばるわ」

ヘルガも最後にもう一度だけ、笑顔を見せてくれた。

涙に彩いろどられた、かくも綺麗きれいなものが存在するの
かと感嘆するほど、印象的な泣き笑いだった。

十

神々から“星の心臓”とも呼ばれる、ヴェステ
ル火山。

その最高峰を中心に、東西へと斜めに連なる同
名の山脈。

さらにそのお膝元ひざには、同名の町がある。

南大陸デナーションでも一番の温泉街だ。

実際、大陸中から遥々はるばる、観光客がやってきて、

湯治客が長滞在する。

夢見心地と評判の名湯や、万病に効くという伝説の秘湯を求めて、他大陸からカカフタフ地峡を渡ってくる者まで存在する。

亜人の姿だつて、この温泉街では珍しくない。

発情期らしい犬コボルト人間のカップルが土産屋の前で

人目も憚はばからずにイチヤつき、猫ケットシー人間の親子連れが

名物の黒たまごを仲良く食べ歩いている。その子

どもたちのお尻しりから伸びた尻尾しっぽが、ゆらりゆらり

と戯れる様に、可愛いものに目がない町娘たちの

視線が釘くぎ付けになる。

ぬめつとした鱗うろこを持つ蜥蜴リザードマン人間や、皮膚を持つ

蛙^{ヴオジヤノイ}人間は、湯上がりのまま水を滴^{したた}らせて平気で歩くので、町人には不評だ。

隠れ里からほとんど出てこないことで知られる、妖精^{ようせい}たちの姿すらこの温泉街では散見できる。彼らは人間たちと外見的な違いはほとんどない。ただ、ハツとするほどの美形揃^{ぞろ}いだし、珍しい髪や肌の色をしている。精悍^{せいかん}な赤銅色の肌をした山妖精^{オレアード}。真^まっ青^{さお}な髪を持つ水妖精^{ナイアズ}に、深みのある緑髪の木妖精^{ドライアド}。かしましい谷妖精^{ナパイア}の娘たちは目に鮮やかなピンク色の髪をしていた。

リクドールの愛するホームタウンはそんな、あら

ゆる人種が集い、娯楽と歓楽と享楽の坩堝るつぼと化した場所だった。

今、彼がいる酒場もそうだ。

入口に近い席では、五人がかかりで熊人アルトス間の偉丈夫と呑み比べをしている。金がかかっているのか、相当の盛り上がりだった。

夜には娯婦にもなる給仕娘たちの中には、牛人タウロス間のすこぶるつきつきの美女がいて、男二人がどちらが客になるかで口論する一幕も。彼女のぱつっんぱつっんのスタイルもさることながら、亜人の娯婦というのはよそではとても珍しいから、どちらも簡単には譲らない。

そんな猥雑わいざつさが、リクドローには心地よい。取り澄ました感じのコジヤレた酒場も嫌いじゃないが、やはり真っ昼間からのんべんだらりと呑むには、こういう店に限る。

町の住民たちも勝手知ったるなんとやらで、リクドローの顔に気づいても、

「おい、神サンがまた来てるぜ」

「相変わらずヒマそうなツラしてんなあ」

「よっしや。一丁、オレらが相手してやっか」
「みたいな調子でやってきて、一緒に酌くみ交わすことも多い。」

リクドローが他ほかの神々とは違って威厳もなく、た

だのグータラだというのは知れ渡っている。

町人の中には、リクドローが「剣の神」ではなくて、ひるあんどん「昼行燈の神」だと本気で勘違いしている者もいるくらいだ。

それにリクドローは今まで一度も、民に何か無体を強いたこともないし、むしろ彼らの好きにやらせている。

だからか、神様なのにまるで畏おそれられていなかっただし、どちらかというと人気があつた。信仰とか崇拜とか、そんないいものじゃない。こういう歓楽街だと益やくたい体もない遊び人が、粹いきだなんだと持て囃はやされる、あれに近いノリだ。

今日なんてもうひどい扱いだった。

「ヘルガちゃんにフラれたからってシヨボくれんなよ、神サン！」

「おれっちが一杯奢おごってやっからよー！」

「オレらあ、モテない男には優しいからな、ガハハハ！」

なんて具合に、春の陽気に誘われた、昼間から赤ら顔の呑兵衛のんべえどもに、今朝けさの悲劇を酒の肴さかなにされる始末である。

「フラれたんじゃないやねえよ。別れの時が来ただけだよ」

リクドーも唇を尖とがらせて抗議するが、酔っ払い

にクダを巻かれた程度で怒ったりはしない。

神様なのに彼らの奢り酒を恵んでもらっては、チビチビと不景気にやっている。

（いや、ホント、こいつらが気のいい奴らだったのはわかってるし、こうやって大騒ぎして、実は慰めてくれてるってのはわかってんだよ？ こいつらはいいいんだよ？）

エールを湛えた木製ジョッキを舐なめながら、リクドールはテーブルの対面にジト目を向ける。

「ギヤツハハッ！ 格好つけたって、ヤケ酒やってりや世話ないぜ、リクドール様」

「ヘルガは優しかったから、リクドール様に愛想あいそ尽

きたって、本当のこと黙ってただけよ」
遠慮のかけらもなく矢笑と冷笑をしてくれる、
若い男女の二人組。

この底抜けに陽気な男の方は、名をギリオン・
フエクダという。

眉根まゆねを結べばさぞや精悍だろう顔つきだが、
屈託くつたくのない笑顔のおかげでいい塩梅あんばいに角がとれて
いる。満腹でお昼寝中の獅子を髣髴させる。

冷ややかな態度の女の方は、ネイ・メラク。美人は美人だが、無愛想だし、まさに他者を寄せつけ
ない類の美しさだ。口を開けば毒しか吐かないし、
たまにニッコリしたかと思えば嘲笑一步手前の冷

笑という、せつかくの美貌を持ち腐れにする天才。二人とも先ほどからずっと、火を近づけたら引火するほど強い酒を、大ジヨツキでガブ飲みしていた。酒豪だとかウワバミだとか、そういう次元の話ではない。常人だっただらとつくにぶっ倒れている。

そう、つまりは彼らは只人^{ただびと}ではなく、超常の存在だということ。

せいぜい二十歳ちよつとの外見に、だまされてはいけない。千年以上もリクドーに仕える眷属^{ガーズ}であり、七人いる騎士^{パラディン}のうち一人だった。

「おまえら、仮にもご主神様^{しゅじん}に対して、いたわり

の気持ちとかかってねえわけ？」

リクドローはジト目のまま、ギリオンとネイに問
い質す^{ただ}。

神と眷属^{ガーズ}といえは、普通は王と側近などよりも
強固で絶対的な関係で結ばれ、普通は神に対して
反抗的な眷属^{ガーズ}もないし、普通は生意気な口を叩^{たた}
く眷属^{ガーズ}だつていないのだが――

「いたわる気あるつて！ だからこうしてヤケ酒
につき合つてあげてんじやんよー？」

「だからフラれてねえしヤケ酒じゃねえっつっ」

「いたわつて欲しがる前に、自分はヘルガをいた
わつてあげたのか、胸に手を当ててみたなら？」

「メツチャ大事にしてただるがっ、人をゴクツブシ亭主みたいに言うんじゃねえっっ」

左右ほぼ同時に大声でツツコまささせられて、リクドーは肩で息をする。

ヨソの子の眷属ガーズたちと、ウチの子の眷属ガーズたちは違うんだって、痛感させられる。

がっくりと肩を落としていると、ウチの子たちはさらに調子に乗って、

「強がんなよ、リクドー様あ。今日は愚痴でも泣き言でも、一晩中だっけ聞いてやっからよお」

「昨日、ヘルガが淹いれてくれた紅茶に、美味おいしいって褒めてあげなかったことは憶えてないの？

—おととい昨日にヘルガと買い物に行つて、荷物を十分の
—も持たせたことは？　そういうのが積もり積も
つて、女に愛想尽かされるわけ。三日前にも—」
右隣にやってきたギリオンが強引ごういんに肩を組んで
きて、左隣に移動したネイがねちねちと言つてき
て—要するにどつちも絡み酒以外の何ものでもな
く、リクド—は慥然ぶぜん顔になる。
「俺は忠実な眷属ガーズを持った、幸せモンだよ……」
ぼやき節でまたチビりとエールを舐める。
この顔がそんなにおかしかつたのが、周囲の酔
っ払いどもの爆笑を誘つた。
—人が腹を抱えながら、

「で、でもよお、巫女様が不在ってなったら、このヴェステルはどうなんだい？」

また一人が目尻の涙を拭ぬぐいながら、
「神サンだって、なんか困ったりするんじゃないかい？」

さらに一人がまだヒーヒー苦しそうにしながら、
「バーカ！ リクドー様は“大戦たいせん”にやあ興味ねんだから、関係ねーよ！」

などと好き勝手に言ってくれる。

（ホント、ありがてえ奴らだぜ……）

リクドーは大きく嘆息すると、ギリオンを振りほどいて席を立った。

「あん？ どこ行くんだい、神サン？」

「おまえらのおかげで、やらなきやいけないことを思い出したんだよ。あんがとな」

皆に軽く手を振りながら、酒場を後にするリクドー。

本当は忘れてなどいなかった。

ただ、自分でもどうにもふんぎりをつけられずに、グダグダしていたただけで。

「ヴェステルの巫女がいなきやあ、困るんだ。俺だっつてな」

タイクーンー

地上の人々は、この世界の名をそう呼んだ。

そして天より降臨した神々が、この世界を戦場に変えた。

百柱を超える彼らが、世界に点在する数百か所の《龍脈》を巡って争い、奪い合い、百年もの永きに亘^{わた}って“大戦”を続けている。

《龍脈》とは、大地^{ガイア}の力の溢^{あふ}れ出る特異点である。

例えば、雲を衝^つく巨大な山。

例えば、神秘的な輝きを湛^たえる湖。

例えば、嵐^{あらし}の晴れぬ荒野。

神々はそういった土地土地からエネルギーを汲^く

み上げ、彼らが持つ超常の力をさらに高めることができないのだ。全ての《龍脈》を領有することができれば、この世界を支配したと言っても決して過言ではないだろう。

多くの神々が覇者たらんと目指し、そしてライバルたちに打ち勝ち、より多くの《龍脈》を得て、より強大な神となっていた。

多くの神々が覇者たらんと目指し、しかしライバルたちに敗れ、力を失って天へと還^{かえ}り、あるいは従属神として生き永らえることを選んだ。

リクドールは後者だった。

十大《龍脈》の一つに数えられるヴェステル火

山を領有していながら、最古の神の一柱でありながら、戦いを本分とする剣の神でありながら――負けたのだ。

それも“大戦”が始まって早々に、覇権争いかから敗退していた。

相手は、同じく古い神であるオードラン。

リクド―は彼の軍門に下った、従属神という立場となった。

ヴェステル火山こそ奪われずにすんだが、それだってオードランが雨の神であり、彼のアウラ霊力とはな馴染じまない《龍脈》だったから、お目こぼしをされたにすぎない。

代わりにリクドローは、ヴェステル火山を管理し、他の神々に奪われぬよう守護せよと、オードランに命じられていた。

やる気の出ないこと甚^{はなは}だしい命令だった。

なにしろオードランは一大勢力を築く強力な神で、ケンカを売ろうとする神などそうそうはいない。別にリクドローが躍起になって守衛役を果たさずとも、ヴェステル火山にちよっかいをかけてくる神は、ひとりもいなかったのである。

「まあ、俺ももうガツガツいきたいほど若くはないし、万々歳さ」

と、リクドローはうそぶくばかりであった。

おかげで「食う」「寝る」「遊ぶ」のグータラとした毎日を、面白^{おもしろ}おかしく謳歌^{おうか}していた。

しかし、守る必要がないことと、端^{はな}から守ろうともしないことは、似ているようで全く違う。

やる気が出ずとも、やっているふりは最低限しななければいけないのだ、リクドローは。

さもなければ、オードランに咎^{とが}められるという理屈だ。

そして、その最低限をするためにも、巫女が必要となる理由があった。

神々は《龍脈》から直接、大地の力―地素^{ガイア}―を引き出すことはできない。

《龍脈》が選んだ巫女を媒介とし、彼女らと契ること
ことで初めて、その強大な力を行使できる。

ゆえに《龍脈》一つにつき、一人の巫女を据え
なくては、領有する意味がないのだ。

今朝までは、ヘルガがヴェステル火山の巫女だ
った。

今日からは、新たな巫女を迎えなくてはリクド
ーの力は激減する。

自分は《龍脈》をあと二つ有していたが、そこ
から得られる地素ガイアは、十大《龍脈》の一角である
ヴェステル火山のものとは比べて、遠く及ばないか
らだ。

温泉街の郊外、よりヴェステル火山に近い麓に、同名の神殿がある。

白大理石がふんだんに使われている、神々しくもどこかしようしや瀟洒な建物だ。

さほどない石段を上がると、広い玄関口に着く。そこで、老紳士がリクドローを待っていた。

「お帰りなさいませ、我があるじ主」
と、どこかしゆだつ洒脱な所作で一礼する。

白シャツの上に、黒ベストを小粋に着こなしたこの老人は、名をカロン・ドゥーベという。

今は白木作りの弓と、白羽の矢を携えていた。
「ずっと俺を待ってたのか？」

「いえいえ、そろそろお帰りになる頃ころあ合いだと思
いまして」

カロンは茶目っ気たっぷりにウインクしてみせ
た。

彼もまたリクドールの眷属ガーズだが、七人いる騎士パラディン
たちの中でも、最も古くからのつき合いだ。

こちらの思考パターンを本当に読んだのかもし
れないし、あるいは実はずっと帰りを待っていて
くれたのかもしれないし、どちらにせよ真実を悟
らせないだけの円熟味があった。

「どうぞ、リクドー様。ご用意いたしておりました」

「ん。助かる」

カロロンが洗練された丁重さで弓矢を差し出し、リクドーはぞんざいに受けとった。

弓は霊木から作った、玄妙な拵こしらえのもの。

矢は時間をかけてこの地の力に馴染ませた、白羽の矢。

リクドーはすぐ矢を番つがえず、弦を引っ張って、何度も具合を確かめる。

「随分とご慎重ですな？」

「何しろ使うのは十五年ぶりだからな」

この弓矢の一式は、新たな巫女を選定する儀式のために用いるものだ。

弦を引く腕力ではなく、アウラ霊力で矢を飛ばす。

ぎりよう技倆で当てるのではなく、やじり鏃に込められた地素ガイアが、人並み外れたアウラ霊力を持つ乙女おとめを、自動的に捜し出す。

だから、弦の具合など大して意味もないのだが、リクドーは引いては離すと、もてあそ弄び続ける。

「リクドー様ほどの古神ともあろう御方おんかたが、なんとも未練がましくいらつしやることですよなあ」

カロンがいんぎん慇懃にすぎてもはや無礼な口調で言いやがった。

さすがが長年仕えているだけあって、リクドーの

心情など簡単に読み当てる。

次の巫女が選ばれれば、《龍脈》はもう過去の巫女と靈的に繋つながることはない。

つまりはこの矢を射放てば、ヘルガは本当にお役御免となるのだ。

永い神の生の間で、リクド―は何度となく選定の儀式をやらされた。人間である巫女は定命の生き物で、いつかは絶対に別れの日が来るのだ。それは致し方ないことだ。そう頭ではわかっているのだ。頭では。

「俺はさ、ヘルガと色恋沙汰をやりたかったわけじゃないんだよ。それこそあいつが、他に好きなら

男ができたから、巫女を辞めたいって言い出したなら、大手を振って送ってやれたんだ。でも、そうじゃなかった。老いる様を俺に見せたくないってさあ……っ。俺は、見たかったよ。あいつがオバサンになって、オバアチャンになって、ずっと大事にしてやりたかったよ」

「仕方ないでしょう。ヘルガ様が望んでいたのは、あなた様との惚ほれた腫はれたたなのですから」

カロンのそんな自明の理をほじくり返すのかとばかり、呆あきれ口調で言った。

リクドールは詠嘆する。

「友達にも家族にも、なれなかつたんだなあ……」

そして頭を振り、愚痴はこれっきりにする。

こんな泣き言をこぼせるのは、眷属ガーズの中でもカロンだけだ。

「悪かつたな、カロン」

「ええ。いいお歳としを召されているのですから、切り替えくらいちやつちやとなさってください」

「うるせえ、ジジイに言われたくないよ」

「わたくしは生まれた時からこの姿です。ジジイと仰おつしやるならリクドール様の方が――」

「あーあーあー、その話はループになるからやめ

ろ！」

リクド―は両耳を塞ふさごうとして、弓矢があるの
でできない。

代わりにしか顰つらめっ面つらになっで、

「……俺、本当におまえの主なんだよな？」

まったくウチの子ときたら、どいつもこいつも
である。

カロンは答えた。

「リクド―様は間違いなく、我が忠誠の限りを捧
げた、剣の神ですとも。ですの、我が忠義に足
る主としての振る舞いを、要求させていたただきた
い」

口調はバカ丁寧なのに——いや、だからこそ逆に、カロンの物言いはいちいち癪かんに障る。

だがこの忠臣の諫言かんげんを、リクドーは聞き入れた。

「巫女選定の儀式を始める」

白羽の矢を、おもむろに番える。

未練を振りきるように、弦を強く引いて——

天へと向けて一息で射放つ。

矢は白い光となり、四月の空を一直線に翔かけて

いった。

「お見事です、リクドー様」

カロンの本物の恭うやうやしさに、一礼した。

「よせやい」

リクドローは蒼穹そうきゆうに曳ひかれた、真っ白な矢の軌跡を見上げたまま、ぞんざいにうなずいた。しばし、見つめ続けた。

そんなリクドローへ、頭を上げたカロンがいたわりを込めて言う。

「永遠に少年のままというのも、寂さびしいものですか」

リクドローは乾き果てた声で答えた。

「もう慣れたよ」

二人で同時に踵きびすを返し、神殿の中へ戻っていく。

「次はどのような巫女様がいらっしやるでしょうな？」

「さあな。蓋ふたを開けてのお楽しみさ」

リクド―は弓持ため右肩だけを竦めてみせた。

でも、願わくば―

神であるリクド―は、神様以外の何かに願わずにいられない。

(心も体も靱つよい少女だったらしい)

いつかは絶対に別れることになるのだとしても、せめて、最後の日が少しでも遠ざかるような、そんな少女でありますようにと、求めずにはいられなかった。